

# モイモイのモイ

(一歩一歩のたった一歩)



## カンボジアの第2高峰 サムコス山1738m(1)

2011年、東日本大震災のあった3月に降り始めた雨は4月になっても断続的に続き、そのまま雨季に入ってしまう異様な様相を呈していた。不安はあったものの、その年、僕はサムコス山に登ろうと考えていた。最高峰アオラル山の経験から、日の長いこと、標高の高い地点でのビバークの容易なこと、(ふつうなら)まだ雨の多

くない5月がベストと考えていたのだ。

長年の友人キムスロイがワークシヨップをきっかけにクライミングを始めていた。彼は、それまで僕がカンボジアでクライミングに出掛けるとき、いつも山麓で辛抱強く待っていたタクシードライバーだ。スムロン、そして新たに仲間になったキムスロイの2人を、登山のトレッキングにとサムコス山へ誘った。こうして僕らは5月の国王誕生日の連休初日の早朝に、キ

ムスロイの商売道具トヨタカムリでシエムリアブを発った。

トンレサップ湖を挟んでシエムリアブの真南にあるポーサットの町からダート道を西へ向かう。一帯はかつてクメールルージュのコアな活動域だった。地雷もたぶんいっぱい残っているだろう。数年前に精細なカンボジアの地図を入手したが、ここはブランクだった。しかしサムコス山の美しい地形図を地理学者の岩田修二さんが送ってくれていた。

キって感じた。なんか嫌な予感。

聞くと、連中はアオラル山のレンジャーと違ってルートを知らなかった。無論、登山も。そういうレンジャーはいらないと僕は言った。しかし、ルールだと押し切られた。うちの2人はほとんど裏切り者。AK47を持たせてもらいすっきり和んでいる。仕方なく、山麓の小さな村でサムコスに登ったことがあると話す青年を見つけ、ガイドを頼んだ。

## 目指せ、 アンコールクライマー誕生!!



アプローチで一休み。トレールは牛車の轍。中央がキムスロイ。このときはまだ余裕の笑みが見えるが。



ぎょえ! アプローチで出くわした地雷残置マーク。油断できません。

昼過ぎに環境省のレンジャーステーションに着いた。サムコス山から連なる馬蹄状の山脈が見渡せる。そこで僕らに同行する2人のレンジャーを紹介された。彼らはなぜかAK47をほろ布で磨いていた。キムスロイとスムロンは神を崇めるような眼差しでそれを眺めている。ポルポトの時代にはまだ幼すぎた、真に内戦の悲惨を経験していないからだろうか。軍人に憧れる幼稚なガ

嫌な予感はずぐに的中した。急ピッチで短時間歩いては、ベタッと休む2人のレンジャーにかき回され、スムロンとキムスロイはアプローチの3時間ですっかりアゴを出してしまっただ。さらに斜面を登り始めると、山がすでにデイープな雨季に入っていることに気が付き、僕は舌打ちした。ジャングルは徐々に密度を増した。ペースは腰までの新雪をラッセルするみたいに落ちた。トレールはどうに消えていた。GPSは頭上を分厚く覆った樹林に阻まれて役に立たない。僕らはルートを完全に見失ったのだ。(続く)